大事に使われた道具たち

～北方京水遺跡の出土遺物から～

調査課
磯貝龍志

考古学コラム「きずな」 No.21
平成 31 年 3 月 19 日
岐阜県文化財保護センター

〈はじめに〉

先日、ボールペンを使って文章を書いていたところ、インクがなくなって書けなくなってしまいました。特に何も考えずに使えなくなったペンをごみ箱に捨て、新しいものを購入しました。そんな頃、北方京水遺跡（大垣市）から出土した中世の遺物を眺めていると、修理されているものや転用されているものがいくつもあることに気づき、捨ててしまったボールペンのことが頭を過りました。「芯を買ってこればまだ使えたのに」と後悔の念が沸き上がってきました。今回は私に「もったいなかった！」という感情を抱かせた遺物をいくつか紹介しようと思います。

〈修理された道具〉

出土した土器の破片を接合する作業を進めている際、甕（図１）の底にあたる破片のいくつかに、黒い付着物があることに気づきました（写真１・２）。破片を接合してみると、付着物は割れた部分に沿って帯状に延び、よく見ると布目が見えました。割れた範囲に布を当て、その上から漆を塗ることでひび割れをふさいだ修理の痕でした。

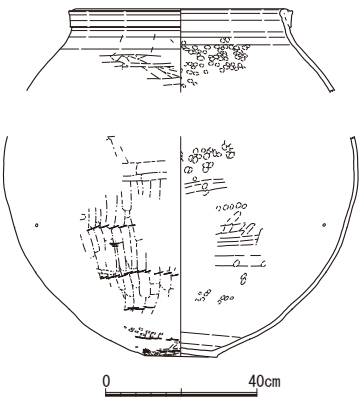

図2　修理された常滑の甕

写真1　修理の痕跡（内面）

写真2　修理の痕跡（外面）

〈用途を変えた道具〉

発掘調査をしていると、元々柱が立っていたことが分かる「柱穴」と呼ばれる穴が見つかることがあります。北方京水遺跡でもいくつもの柱穴を確認し、底から平らな石が見つかった例もあります（図２）。この石は礎盤石（そばんせき）と呼ばれ、建物の重さで柱が沈下することを防ぐために柱の下に置かれました。出土した礎盤石のいくつかを触ってみると、妙にツルツルした手ざわりのものがありました（図３）。じっくり見ると細かい真っ直ぐなスジが入っており、刃物を研ぐのに使った砥石であることが分かりました。使わなくなった道具も簡単には捨てずに、別の使い道を考えて使ったようです。

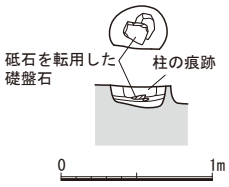

図2　礎盤石が出土した柱穴

図3　砥石を転用した礎盤石

〈形を変えて使われた道具〉

中にははじめに作られた形から姿を変えることで新たな道具として生まれ変わった例もあります。

図４に示したものは「温石（おんじゃく）」という昔のカイロで、温めて、布に包んで使いました。ここで温石の横断面に注目してみます。ほぼ直角に屈曲していることが分かるでしょうか。この屈曲は鍋の底から側面にかけての形状を反映したもので、温石になる前は石鍋（図５）として利用されていたようです。滑石という軟質で保温性の高い石の特性を活かした合理的な転用品です。

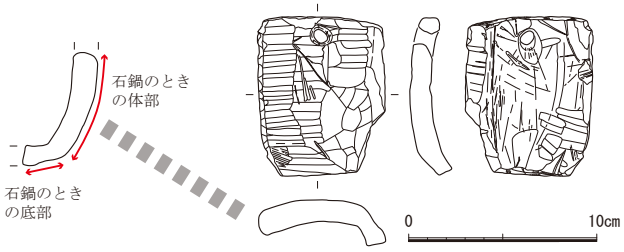

図4　石鍋を転用した温石

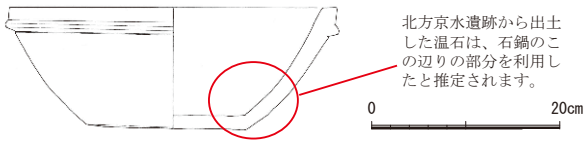

図5　広島県草戸千軒遺跡から出土した石鍋（広島県立歴史博物館 1998、18 頁）

また、発火具である火鑽板（ひきりいた）と呼ばれる木製品も出土しています（図６）。この火鑽板を真上からみると片側（図６上側）に弧を描く部分があることや、紐を通したことが想定される４つの孔があることから、元々は容器の蓋として使われていたことが想定されます。

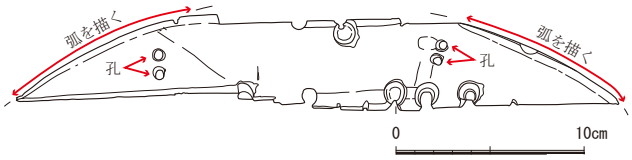

図6　蓋材を転用した火鑽板

〈おわりに〉

中世は、お金で商品を売買することが活発化した時代で、それに伴い流通も発達しました。しかし、当然トラックなどは存在しないので、物の運搬には大変な労力が必要であったことでしょう。現在のように欲しいと思ったら即日商品が届く状況ではありません。そうした社会の中で、ものを大切に使っていた中世の人々の姿を、北方京水遺跡の出土遺物から垣間見ることが出来ました。

〈挿図出典〉
鈴木康之 1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告２　広島県立歴史博物館